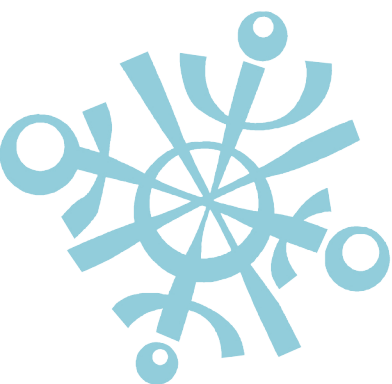


地と星に逢う
金蘭の契い



目次

一	螢を呼ぶ甘露の罨 ゝ東方地霊殿ゝ	2
二	大山鳴動する鼠一匹 ゝ東方星蓮船ゝ	22

一 螢を呼ぶ甘露の罨 〔東方地霊殿〕

「『すーカー』」

「あ、いや、そうって決まったわけじゃなくて、そうなのかなーって思っただけよ。あくまでね？」

話を切り出したとたん、その場に居た全員に声を揃えて聞き返され、リグルは困った顔で頬をかく。

ここは湖畔に程近い森の広場。紅魔館とは湖を挟んで対岸のこの地域は、吸血鬼の勢力圏からはやや遠く、かといって魔法の森の魔法使いが出没するキノコの群生地というわけでもない。結果、ここにはそれほど力の強くない妖怪や妖精たちが遊び場のように群れ集うようになっている。

しかし、いつもの面々の暢気な雰囲気とは対照的に、リグルはずいぶんと憔悴しているようだった。

「最近、家に見たことない包みが置いてあったりしてさ。気になってしょうがないの。誰からかもわからないし。一応聞くけど、みんなじゃないんでしょ？」

「だって。ルーミア知ってる？」

「全然？」

闇妖に倣うようにこくこく頷く一同。

「包みって、中身は？」

「見てない。なんか気持ち悪いもん。……それに、ずーっと誰かに見られてるみたいな感じもするんだよね」

「ええっ……怖いねっ」

本当にストーカーなのかな、と応じる大妖精を、チルノは笑い飛ばした。

「まっさかあ。大ちゃんそれはないない。リグルに限って」

「な、なによそれ！ わっ、私だってねえ、ファンのひとりやふたりくらいっ」

「熱心なファンだねー」

こぶしを握って立ち上がり、触覚をびこんと立てて頬を膨らませるリグルだったが、身構えたチルノと応酬を始めるでもなく、すぐに空気の抜けた風船のようにすんと腰を下ろしてしまふ。そのまま抱えた膝の上に顎を乗せ、背中を丸めて深い溜息。

「……はあ。なんかもう疲れた。普通に考えて気にしすぎなんだろうけど、いちど気になったらどんどんそう思えてきちゃってっ……」

「お疲れだねー」

俯いたリグルの頭を、よしよしと撫でてやるルーミア。思ったより深刻そうなリグルの様子に、さすがにチルノもそれ

以上の軽口は自重する。

「しょうがないなリグルは。……なんか心当たりなの？
そいつに」

「あつたらこんなに困ってないってば。それに本当に居るの
かどうかもわかんないんだから」

「……でもさ」

何事かを言いかけたチルノだが、そこであれ？ と声を上げた。きよろきよると左右を見回して、

「ねえ、そういえばみすちーは？」

「あれ？」

ついさっきまで一緒にいたはずの彼女の姿は、いつの間にか話の輪から消えている。

「さっきまでいたよ。帰っちゃったのかなー？」

「でも、それなら一言くらいあつても……」

「ね、ねえ、あれ！」

皆が夜雀の姿を捜す中、リグルが森の一角を指さす。

広場から少し離れた、樹齢にして数百年を数えると思われる
苦むした老木。その節くれた枝の先に、白く禍々しい粘つ
いた糸が幾重にも絡み付いている。

ミステイアはまるで百舌の早贄のように、その枝先に上下
逆さまに括りつけられていた。

「……みすちー？」

一本一本は髪よりも細い糸が何本も束ねられて、執拗なほど念入りに、哀れな夜雀の肢体を拘束している。

不自然な角度で身体を固定された彼女の服の裾は無惨に引き裂かれ、むき出しの太腿や二の腕に深々と食い込む糸がひどく痛々しい。

四肢はおろか、翼の自由さえも奪われて宙吊りにされ、無惨な姿となった彼女は、うつすらと瞳を開け、ぼんやりとした瞳であらぬ方を見つめていた。

「んう……ッ」

糸の束に割り裂かれて塞がれた唇の隙間から、苦しげに息をこぼし——ミステイアはじつとりと汗の浮いたうなじを震わせ、わずかな身じろぎを繰り返す。

あまりにも無惨な姿の友人を前に、チルノたちはしばし言葉を失い——

「なんだ、みすちーこんなとこにいたじゃん」

「なーんだ」

「いや待ちなさいっ!!」

あまりといえばあまりな対応に、ミステイアは口を塞ぐ糸をぶちぶちと噛み千切って全力で突っ込んだ。宙吊り糞虫状態のまま、全身を揺すって抗議の声をあげる。

「こんな目に遭ってる友達に対して、もうちよつと言う事ないのっ!？」

「だってほら、いまさら誰に食べられたのって話だし」

「定番ネタに頼りすぎるのはどうかと思うなー？」

「うん。新鮮味に欠けると思うよみすちー」

「うわぁーんっ!？」

チルノにまで言われてしまえば、もはや夜雀に立つ瀬なし。ミステリアは糞虫状態のままぶらぶら揺れながら滂沱の涙を流す。

「と、とにかくこれ外してっ！早く下ろしてよおっ」

「もー、しょうがないなあ。ルーミア、そっち持つて」

「了解なのかー」

絡み合った粘つく糸を引き剥がすのは意外に困難を極め、ミステリアの救出にはかなりの時間を要した。

「あう、べとべと……」

ようやく解放され、ぺたんと地面にお尻をついて、半泣きで顔に粘りつく糸をぬぐうミステリア。少し赤くなった鼻の先を擦ってすん、と吸り上げる。なんとも艶っぽいその仕草に、その場の皆がそれにしてもこの子食べられるのが似合うなあ、と思ったりした。

リグルが差し出したタオルでミステリアの顔をぬぐってやるその隣で、チルノはむう、と顔をしかめる。

「なにやってんのさみすちー。リグルがせっかくオンナになれるかの瀬戸際だったのに」

「いや私そんな話してないよ!？」

思わず抗議を入れるリグルだが、それは見事にスルーされる。

「わかんないわよ。さっきいきなり目の前が真っ白になって、口も塞がれて、身体が動かなくなっと思ったたらそのまま引きずり込まれるみたいに——ってちよっと！みんなで『またかよ』みたいな顔しないでくれる!？」

「でもみすちーだし、ほら」

「だから鳥頭とか三步忘却とかそういうんじやなくてねっ！っていうかチルノにそーゆう顔されるのなんか妙に腹が立つんだけど」

「ああほらみすちー、動くと上手く拭けないってば」

リグルに言われ、しぶしぶ逆立てていた羽根を下ろすミステリア。

彼女を絡め採っていた粘つく糸を指先に摘み上げ、大妖精とルーミアも首をひねる。

「なんだろうね、これ。トリモチじゃないみたいだし……人間の罠?」

「あんまり美味しそうじゃないねー」

「ほんとにみすちーは情けないなあ。そんなんじやまた食べられちゃうよ?」

「食べられてないってばっ」

「……ちよつと見せて」

言い合いを始めたふたりをよそに、リグルは神妙な面持ちでその糸をじつと覗き込んだ。

「どしたの、リグル」

「これって……」

彼女が心当たりを口にしかけた、その時だった。

「あ、あのっ！」

背後からの声に、一同が揃って振り向けば、そこには黒と褐色の服を着て、金髪を頭の後ろで結わえた少女の姿があった。その背後ではもう一人、桶から顔を覗かせるおさげ髪の少女が恐る恐る様子を窺っている。

「な、何よあんたたち」

「……ええとねえ、その、どこから話せばいいのかな……」

あのね？ 私たち、地底から来たんだけど——」

「地底!？」

地底の妖怪——それがどういったことを意味しているのかはチルノでも知っていることだった。妖怪と人間が共存するこの幻想郷で、様々な理由でそのコミュニティからも拒絶された妖怪たち。

その関係は、決して友好的と呼べるものではない。

「まさか、みすちーにこれやったの、あんた?!」

「え、えーつと……」

口籠る少女のその反応が、何よりも雄弁に答えを示していた。

たちまち高まる緊張のなか、チルノはいち早くスペルカードを構え、皆を庇うようにして前に立つ。

「よくもみすちーを！ 勝負なら相手になるわよっ！」

「ちよ!？ ち、違うよ、そうじゃなくてね!？」

「もんどどうむようっ！ みすちーの仇だあっ」

「チルノちゃん待つて！ この子、ひよつとして——」

スペルカードを宣言しかけた氷精の袖を、大妖精がぎゅつと引っ張って押しとどめる。

「なにすんのさ大ちゃん、あたいは今……」

「ま、待つて！ 間違えちゃったのは謝るからっ！ 誤解な

んだってば!」

拳を握り締め、いまにも泣き出しきそうになるのを懸命に堪えながらの少女に、敵意らしいものは見られなかった。深く頭を下げて、彼女は縋るように声を絞り出す。

「だからお願い、話を聞いてっ」

「……話？」

「チルノちゃん、聞いてあげよ？ みんなも」

「…………わかったよ」

大妖精に諭されて、チルノは不満げながらもスペルカードを引っ込める。

「本当にごめんなさいっ。ちよつとその、巢にかかった！と思つたら急にテンション上がっちゃつて……」

「巢？」

「あ。自己紹介もまだだったね。私は土蜘蛛の黒谷ヤマメ。

こっちはキスメ」

彼女の背後で釣瓶落としがちよこんと頭を下げる。

そうしてヤマメと名乗った金髪の少女は、顔を上げ、じつ、とリグルを見つめた。

「それで、そ、その子に……大事なお話があるのっ」

「へ？ 私？」

ここで自分のことが出てくるとは思つていなかったリグルは、急に話を振られてまばたきをひとつ。

「だ、大事な話なの……お願い」

「え、あ、まあ、いいけど……」

ヤマメは隣のキスメと視線を交わし、決意の表情でリグルの正面に進み出る。右足と右手が一緒に出るぎこちない歩き方で、いまにもぎぎ、と錆びついた音まで聞こえてきそうだった。

前髪に隠れていてもはつきりわかるほどに、その頬は紅く染まつている。

「えっと？ なに？」

「そ、その、あのっ」

尋ねるリグルに対し、言葉がつつかえた様子であうあうと呻くヤマメ。そんな彼女に後ろから応援が飛ぶ。

「ヤマメ、頑張つてっ」

「……うんっ」

キスメに促され、力強く前を見た彼女は、そのまま背後に隠し持っていた包みをリグルにぐつと突き出して、

「ず、ずっと前から好きでしたっ。わたしとっ」

リボンをかけたプレゼントと一緒に、一言——

「わ、わたっ、私に食べられてくださいっ！」



一時は混乱を極めた場もとりあえず解散となり、広場に残されたのはリグルとヤマメのふたりきり。湖畔の朽ちた丸太の上に並んで腰かける二人の間を、なんとも言い難い沈黙が埋める。

ちらり、と横目で俯いたままのヤマメを窺つては、目が合っ
いそうになつて慌てて顔をそらすことの繰り返しをしながら、
リグルは自問する。

（えっと、なんでこんな——どうしてこうなった？）

降って湧いた告白イベントに、すっかりオーバーフローしてしまった思考能力は先程から空転を続け、思うように相手の姿すら見ることもできない。

（好き？ いやその、それってつまりその、告白？ ……ルーミアじゃあるまいしまさか食べ物の好き嫌いつてことじゃないよね？ よね？ ってことはつまり、つまり、その……えええええ!?!）

時間とともに落ち着くどころかますます混乱の度合いを増してゆく頭の中。リグルは膨らみかけた様々な想像を追い払うようにぶんぶんとかぶりを振った。

（つて、いつまでもこんなんじゃないわよつ）

とうとう緊張に耐えられなくなったリグルは、半ば自棄になつて口を開く。

「あ、あのっ」

意図せず上げた声が見事に重なり、ぶつかつた視線がリグルの顔の温度をかあーつ、と上げてゆく。同じように真っ赤になつた顔を伏せるヤマメの仕草に、リグルはますます動揺してしまつた。

とにかく何か言わなければ。そう焦りながら無理矢理に言葉を継ぐ。

「え、ええとつ」

高鳴る鼓動を抑えながら、あさつてを向いて続けた声は面白いくらい裏返つていた。

「え、ええと、その、つまり——わ、私と、付き合つて、つて話だけど」

「う、うんっ」

「……ね、念のため聞かせて。あの、まさかとは思うけど、私のこと男だとか思つてるとか、そういう……?」

「そ、そうなのっ!?!」

「違うよ!?! 断じてオトコノコ違うからね!」

慌てて否定するリグルに、ヤマメはそつかあ、と残念そうに、安心したような不思議な表情でそつと胸を撫で下ろす。

「……あー、ビックリしたよお。そりやね、私も女の子同士でヘンかなつて……ちよつとは思つてたけど」

「そ、そうかな?」

「……でも、違う。うん。違うみたい。そういうのじゃないよ。きつとあなたはあなただから。私は、リグルがリグルだから、好きになつたんだと思うし」

「そ、そう、なんだ」

堪え切れなくなつた視線を膝の上のプレゼントの包みに落として、リグルは想いを巡らせる。

なんでも、これまでもヤマメは何度も告白のためリグルの家を訪れていたらしい。しかし、いざ会おうとなるとどうし

ても気後れし、きつかけがつかめないまま、いつもその場にプレゼントだけを残して帰ってしまっていたのだという。

どうして話しかけてこなかったのかと言えば、ヤマメたち地底の妖怪は嫌われ者だからだという理由らしい。

けれど、こうして話していれば、ヤマメはごくごく普通の妖怪だった。確かに少しばかり特殊な能力を持っているが、そんなのはリグルも彼女の友人たちだって似たようなものだ。リグルは不思議に思い、それを口にする。

「あのさ、ヤマメ。……気分悪くしたらごめんね。正直、まだその、好きって言われてもどうしていいか良くわからないんだけど……」

「うん」

こくり、と固い息を飲み込み、リグルはヤマメを見る。

「なんで、私を？」

「……一目惚れ」

「へ？」

ぽかんと口を明けたリグルに、ヤマメは胸の前でもじもじと指を絡めあわせる。

「こないだから、地底と地上の交流が始まったじゃない。それで、地上との連絡孔の増掘と拡張が決まったのよ。私がその担当になってね。それで——」

地上と地下の偉い妖怪同士が、山の神様の仲介で巫女と一

緒にそんな話し合いを持ったという噂は、リグルも耳にしたことがあった。

「何年ぶりになるかなあ、空を見たの。ずっと地底にいたからねえ。折角だから神社にでも挨拶に行こうって思ってた……それで、リグルが飛んでるのを見たんだよ。」

遠目だったし、その時はリグルは気付いてなかったみたいなんだけど」

「そう、なんだ」

「うん。リグルの羽根、……とっても綺麗だった」

青い大空——もう記憶にもぼんやりとしか残っていないかった地上の空に、まるで硝子細工のような美しく光る透明な羽を拡げて飛ぶ、少女の姿。

地底に隠れ潜んだ土蜘蛛が、ずっと昔に失い忘れていたもの。それをリグルが思い出させてくれたのだ、と。

そう、ヤマメは言う。

「う……あ、その、ありがと……」

こんなにもまつずぐな好意をぶつけられて、リグルはますます言葉に詰まってしまふ。

自分にはないもの、足りないものを素直に素敵だ、と言える。それはきつとすごい事なんじゃないだろうか？とリグルは思った。

まして、蜘蛛は蟲の天敵でもあり、螢よりもよっぽど強力

な妖怪として有名だ。人を襲ったり、美しい女性の姿を取ったり、時には鬼と呼ばれて英雄と呼ばれるような人間と太刀回りを演じることだってある。

事実、リグルの目にもヤマメはとても、可愛らしく素敵な女の子に見えた。

そんなヤマメが、自分のことをず、好き、だなんて――

（あああ、落ち着け私っ!?!）

好き、という単語を思い浮かべた瞬間、ぼつと頭が沸騰を始めるようになる。ぎゅつと目を閉じ、リグルは強引に話題を変えた。

「えっと、そ、その服、可愛いね」

「あ、うん、ありがと。これ、お気に入りなんだ」
頑張って作ったから、とはにかむヤマメ。

「え？ それ、自分で作ってるのっ？」

リグルの服は使役する天蚕たちに時間を掛けて編ませたものだが（そのため下着まで100%ピュアシルク、天蚕糸の特製なのだ）、ヤマメの衣装は彼女自身が妖力を籠めて編んだものだという。

「うん、ほら」

ヤマメがちよいと持ち上げた袖を軽く引っ張ると、布地はさらりと極細の糸束に溶け崩れてゆく。むき出しになった白い腕で、ヤマメは糸の端をはい、とリグルに手渡した。蜘蛛

の糸は蚕のそれよりも強靱で、なおかつ肌触りでも負けてはいない。

「すごい……」

リグルが糸を返すと、ヤマメは再び目にもとまらぬ早業で、服の袖部分を編み直してゆく。ものの数秒で元に戻った服に、リグルは再度感嘆の吐息をこぼした。

「お、大袈裟だねえ。別にこれくらい、どーってことないよ。それに、あんまり自慢できるような事でもないからさ」

「どうして？」

「や、ははは。だってほら、私の住んでるとこ地底じゃない？ みんなに嫌われて地底に逃げ込んだ妖怪がさ、あんまり浮かれ気分でお洒落とかお化粧とか、そういうのってどうかなーって思うわけさ」

「そんなことないよ。とっても似合うと思う」

「う、あ。……ありがと」

それは、リグルの心からの言葉で。

今度はヤマメが耳まで赤くなる番だった。



さて。そんな具合に初々しい二人を、近くの茂みの中から窺う怪しい影がいつつ。

「逢引なのか」

「ねえ、このあとどうなるのかなっ」

「ああもうじれつたいわねっ！ 何やってんのさリグル、早くいくとこまでいっちゃえばいいじゃない！」

「ねえチルノちゃん、意味分かって言ってる……？」

無論ながら、友達思いの彼女たちが大人しく場を譲るわけもなく。物陰から応援を送り続ける一同のテンションは激しく高い。

特にかしこしい3人から少し離れて取り残された大妖精がちらりと脇を見ると、桶から半分顔を覗かせてはらはらと成り行きを見守っているキスメと視線が合った。

どことなくシンパシーを感じる（髪の色も含めて）二人は、そろって苦笑する。

ヤマメとリグル、湖の側に並ぶ二人の背中、最初の頃には比べてだいぶ近くなっていた。が、寄り添うには至らず、わずかに離れたその小さな隙間がどうにもどかしい。遠目にもわかるほど落ち着かない様子のリグルは、すっかり会話の主導権も握られっぱなしのようだ。

「なんていうか、最初はそう見えなかったけどヤマメって結構お姉さんっぽい感じだね？ あの服可愛いなあ」

「見た目あんまり変わらないけど、不思議だねー」

「……うん、きつとあの子、リグルにはお似合いよ」

チルノが、そう言つて小さく笑つた、その時。

ふわり、どこからともなく花の香りがあたりに満ちる。

……それは本来、何をにおいても警戒せねばならない危機の先触れのはずだった。

しかし。降つて湧いた友達達の恋バナに夢中になっていたチルノ達は、迂闊にも全員、それがなんの予兆なのかをすっかり忘れていた。

「——へえ、誰が誰とお似合いなのかしら」

靴音とともに、じつとリグルとヤマメの様子を窺うチルノの背中に、声がかかる。

「決まってるじゃない、さつきあの子がリグルに告白したの。そんでいま初デート中つてわけなのさ！ あたいたちも応援してあげてるんだから邪魔しないでっ」

「……それで？」

ざわり、と森の木々が梢を震わせる。いつの間にか自分以外の返答がなくなっていることに、チルノはまだ気付かない。

「ああもうっ。だからリグルが心配でこうやって見てるんじゃない。馬鹿ねっ」

「……そう」

「ぐえっ?!」

いきなり背後から凄まじい力で頭を掴まれ、チルノは悲鳴を上げた。ゆらり、と動いた影は、そのまま容赦なく氷精を

宙に持ち上げる。

「……げ!」

反射的に振り向いて、そのまま驚愕に固まるチルノの最後の叫びは、あつさりと途切れた。



「——っ!」

ぴいん、と触覚を跳ねさせ、突然『氣を付け』をするように背筋を伸ばしたリグルを、ヤマメが心配げに見つめる。

「どうかしたの?」

「え、あ、……その、なんだか猛烈に嫌な予感が」

このところすっかり不幸センサーと化したリグルの触覚だが、往々にしてそれが不幸を察知した時には手遅れという、実に役に立たない代物だ。今回も同様、リグルが言葉を終える前に、周囲の森に唐突に変化が訪れていた。

これまでは休むことなく聞こえていた小鳥の囁りや蟲の声、そうしたものが一斉に消え失せ、痛いほどの静寂があたりに満ちる。

次の瞬間、まるで突風が吹きつけるように木々が唸りをあげた。

さん、と巨人が荒々しく森をかき分けるように——あるい

は、幾百の樹齢を重ねる木々がおのずから支配者たる『彼女』に道を譲るように。重なる梢が、枝が、うねりざわめき、左右に押し開かれてゆく。

大気すら震わせる威圧感を伴って、彼女はそこに居た。

鮮やかな赤いチェックのスカートに、袖がまぶしい白いブラウス。その上には同じ格子模様のベスト。リグルと同じ緑の髪。

上げた薄いピンクの傘の下、ずたぼろのチルノを引きずりながらの微笑がいつそ清々しいくらいの威圧感を伴っている。
(ああああああ!! やっぱいいいい!!)

——四季のフラワーマスター、風見幽香。

通り名こそさりげなくミステリアに似てはいるものの、その危険度、能力、全てがけた外れの妖怪であった。

(な、なんでこんなところにつ!!)

嫌な予感がものの見事に的中したことに焦るリグルの背中を、冷や汗が滝のように流れ落ちてゆく。けして後ろめたいことなど何もないはずなのだが、ヤマメを背中に行っているだけでリグルはなぜだか猛烈な後ろめたさを覚えてしまっていた。

ちらり、と視線を脇に向ければ、そこには残機を減らした友人たちが、死屍累々と無残な姿で転がっている。

(——ひいいいい……!!)

喉奥に湧き上がる必死に悲鳴を飲み込みながら、リグルは恐る恐る幽香に声をかけた。

「ゆ、幽香さんっ?」

「ずいぶん楽しそうね?」

動かないチルノを皆の上に放り捨てた幽香の視線は日傘の下に隠れてよく見えない。けれどその赤い唇が、にい、と三日月のように弧を描く。

表情こそ笑ってはいるが、笑みの要素なんて一ミクロンも含まない笑顔に、リグルの背中に怖気が走る。

（お、怒ってるっ。ものすつつつごい怒ってるよアレ!?）

「……ねえ? そこの子、新しいお友達? 私にも紹介してくれるかしら?」

「リグル、こいつ誰?」

しかし、こともあろうにそんな状態の幽香の前に、空気を読んでか読まずでか、ヤマメははつきりと不快感をあらわにしていた。

「や、ヤマメっ!」

「大した用事じゃないならあとにしてよ。ひとがお話してるときに、礼儀がなくなっているんじゃないかねえ?」

「あら。変ね? その子があなたと楽しくお喋りしてたようには見えなかったけれど?」

「っ……」

幽香の言葉に歯を軋ませ、ヤマメは視線を陰しくする。

『『あんた』じゃない。黒谷ヤマメ。地底の妖怪よ』

「ああ、そうなの。あの鬱陶しい地底の、ね」

「……そうか、あんたが風見幽香ね? 聞いたことあるよ。

有名ないじめっ子だっけね。あのさ、今日はお呼びじゃないから、普段どおり花畑に籠もっててくれない?」

「ふうん……」

ヤマメと幽香。リグルを挟んで相対する二人の間で、火花を散らすような鋭い視線がぶつかり合う。

（な、なにこれ、なにこの異空間っ!? 私置いてきぼりじゃないっ。虫だけに蚊帳の外ってこと? ……あ、今私上手いこと言ったかも。ってそうじゃなくて!）

リグルは先程までとはまた別の混乱の最中にあった。いや、あくまでも彼女が事態の中心であるのは確かなのだが。

……というか。

（同じ1BOSなのになんでよりにもよって張り合おうとしてるのかなこの子はっ!）

異変の表舞台に立つことこそ少ないが、風見幽香の強さは誰もが認めるところだろう。『花を咲かせる程度の能力』という一見些細なものに聞こえるチカラで、疎密や境界というものを支配する大妖怪と十二分に渡り合うのだ。

しかもその能力すら、彼女生来のものではなく、ただの戯

れで操っている、余興のようなものに過ぎないという。

そんな四季のフラワーマスターと真つ向睨み合っているヤマメに、リグルは気が気ではない。

「で、もっかい聞くけど何か用なの？　いま取り込み中なんだけど」

「ええ、あなたじゃなくてその子のほうにね。『いつもみたい』に『ふたりだけ』でお話をしようかと思ったのよ」

殊更に。

一部を強調した言葉に、感情を逆撫でされたヤマメの表情が強張る。

「ああ。別に私は『夜でも』構わないわよ。『この前みたい』にね」

余裕をたっぷり覗かせる口調で、幽香は小さく、ぺろりと唇を舐め、

「ああ。それと——。『あの時』汚した服、ちゃんと取りに来てね？」

「……………！」

（うえああああ!!）

明らかに空気を变える一言に、リグルは震え上がる。

いや、弁解させてもらえば確かに服が汚れたのはそのとおりなのだが、あれは断じてそのような一般的に言われるところのやましいことがあったわけではなく、頼まれて運んでい

った蜜の瓶が割れてしまって、その、それがあれでああして結果的にいろいろともう言葉を尽くせないようなひどい事になってしまったからで——

リグルが答えに窮しているうち、ずかずかと近寄ってきた幽香は、有無を言わずにリグルの身体を引き寄せ、後ろから抱きかかえる。

す、と傘の下に覆われて暗くなった小さな日陰から、赤い口元が細く開き、ぞろりと生え揃った牙が、ヤマメを威嚇した。

「解ったかしら。この子とは私が先約なのよ」

「ゆ、幽香さんっ!?　……むぐっ!?」

無理やり抱き寄せられたリグルの膝からプレゼントの包み滑り落ち、叫ぼうとした唇には甘やかに香る幽香の白い指が突っ込まれる。

花の蜜か、花粉か——頭をくらくらさせるほどの甘さに、リグルの意識がくらりと揺れた。

「ちよ、ちよっと、あんたねえっ」

「病気だらけの蜘蛛なんか食べても美味しくないし。見逃してあげるわ」

そう言つてヤマメを無視し、幽香はリグルの胸元に指を伸ばして、ブラウスのボタンをぴん、ぴんと爪で弾いてゆく。

「ふあっ……!!」

肌をあらわにされる羞恥に、たまらず身をよじるリグルだが、幽香は抵抗を許さない。さらに、力強い指が容赦なくリグルの柔肌をまさぐってゆく。

「や……だめっ……」

服の内側にひやりと外気を感じ、リグルは顔を赤くさせ、もがくが——幽香の腕を跳ねのけることはかなわない。暴れる彼女を抑えつけた幽香の靴が、ぐしや、とプレゼントの包みを踏みつけた。

「ゆ、幽香さんっ、やめてっ……」

「あら？ 恥ずかしいの？ なぁに、この前はあんなに可愛い声聞かせてくれたのに」

「ち、違!!」

まるで見せつけるように押し開かれたリグルのブラウスの隙間から、ほんのりと色づいた胸の先端の突起が覗く。そこで幽香はちらり、とヤマメのほうを見やった。

「ねえ、あなたも聞きたいかしら？」

嗜虐心を露わにした、風見幽香の笑み。

それに対しヤマメは、真剣な表情で——

「……………」

……………。

……………。

……………。……そ、そんなことないわよっ!」

「いや即答しようよそこはさ」

たっぷり30秒くらい迷ってからようやく返事するヤマメに、思わず自分の状況も忘れて突っ込むリグル。

「と、とにかく! やめなさいっ、リグルが嫌がつてるじゃないっ」

「違うわ。この子は、こういう風にされるのが好きなのよ。そうじゃなかったらこうされるのがわかって、私のところに来るわけじゃないじゃない。ねえ？」

朝顔の弦のようにしなやかな手指はリグルの頬に触れ、ついと伸びた薬指が濡れた唇をなぞる。

花の蜜を湿らせた指先は、柔らかな唇を滑って、強引に押し開け、そのままその奥の白い歯をこつりと叩いた。

「んうっ……」

「ほら。ね？」

声も出せずもがくリグルの耳元で、艶っぽく囁く幽香。

「ど、どう見たっていじめてるじゃないっ」

「ふふ。そんなことないわ」

「ッ、やめろって、言ってるでしょお！」

とうとう辛抱の限界を迎え、ヤマメは本性を露にしてがあとと牙を剥いた。鋭い蜘蛛の爪を覗かせ、複眼を開いてぎんとまっすぐ幽香を睨む。

「やっぱあんたのこと、すっごくく気に入らないわっ! す

ぐにリグルから離れて！ はやくっ！」

「嫌よ。この子は私のだもの」

意地悪な表情で素っ気なく答える幽香に、ヤマメはさらに怒りを募らせた。

「……っ、さつきから、聞いててすっごい腹が立つんだけど！たとえリグルの気持ちも本当にそうなんだとしても、リグルの名前もちゃんと呼んであげないような奴に、そんなこと言う資格ないわっ！」

「……へえ」

激昂のままにヤマメが叫んだその一言は、何やら特別の地雷だったらしい。

特段何か表情を変えた様子もない幽香は、無造作に傘をくるん、と回し、その先端をヤマメに向けた。

同時、傘の端を起点にして閃光のように無数の楔弾が弾け飛ぶ。それは爆音とともに円形に幾重にも重なり、まるで色鮮やかに花開く花卉のように辺りを満たした。

「うひゃあああ!？」

スperlカード戦の合意すら無視した突如の弾幕が、自分の身体を抱えてへたり込んだ半裸のリグルの周囲に降り注ぐ。風を切り地を穿つ弾幕は、その一発一発がリグルが渾身で撃ち込む弾の威力すら上回っていた。

が、

そんなリグルを、白い糸がふわりと絡め取る。折り重ねられた強靱な糸は、膜を編んで決り跳ねる土埃を遮断し、リグルを優しく包み込んだ。

その一方で大きく跳ねて距離をとったヤマメは、宙空にびたりと静止する。

「ようやく本性見せたわね性悪妖怪っ！」

よく見れば、あたりには既に無数の糸が張り巡らされ、森の中の狭い視界を切り取っていた。糸の上を跳ねるように移動し、ヤマメは両手の爪を覗かせて、幽香の弾幕をかわし、反撃の楔弾幕を撃ち放つ。

「人の恋路を邪魔する奴は——」

無造作に傘を広げ、それを撃ち落とす幽香にびしりと指を突きつけ、

「馬に蹴られて死んじまえ！」

ざわり、と舞い揺れる糸を揺らして、ヤマメは叫んだ。



「——いい覚悟ね」

がちん、と引鉄を叩き落す擬音と共に撒き散らされる牽制の楔弾、追撃の光弾、風を切る向日葵を模した特殊大型弾。四季のフラワーマスターの弾幕は、瞬時にヤマメの元へとに

押し寄せる。

「——っ」

辛うじてそれをかわし、ヤマメも負けじとスペルカードを構えるが——それよりも早く。幽香の手元で膨大に膨れ上がった魔力の奔流が、恐ろしいほどの滑らかさで解き放たれる。閃光^{マスタースパーク}の射手。

いまや白黒の魔法使いの代名詞となったそのスペルの、原型となる純粹魔力の閃光。

視界を真二つに薙ぐ煌々とした輝きが、爆音を轟かせ土蜘蛛を光の奥に飲み込んだ。

「ヤマメっ!？」

リグルの悲鳴が、焼け焦げた森の一角に響く。

「ほ、本当に問答無用だねっ!？」

視界を埋めた閃光が過ぎ去る土埃の中、煤けた頬を拭い、ヤマメは焦げた地面の下から飛び出した。

……グレイズ失敗、被弾1。直撃寸前で近くに掘り抜いていた地底との連絡孔に避難したのだが、幽香の一撃は地面ごとヤマメのいた場所をえぐり取っていた。

残機を減らしたヤマメは、なおも繰り出される幽香の弾幕から安全地帯を求めて上空へと逃れる。

この短時間の攻防の間に、空中での姿勢制御と移動に使っていた蜘蛛の巣の大半は幽香に焼き払われていた。

羽根をもたないヤマメは、伸ばした糸を風に這わせて宙を浮遊。辛うじて空中での移動手段を確保する。

「まどろっこしいのは嫌いなよね」

今度はそれを追うように、大地がうねった。とん、と幽香が閉じた傘先で地面を突くと、土塊を跳ね散らかして異常成長した草木の根が、大蛇のようにヤマメへ襲い掛かる。

「うわ!？」

「これもあげるわ」

脚を絡めとられてバランスを崩したヤマメめがけ、追い打ちとばかり、撫子にも似た十字の花弁を模した弾幕が放たれる。

「っ、罌符『キャプチャーウェーブ』っ」

緊急回避のスペルカード宣言で放った蜘蛛の糸を繰り、展開する弾幕の外へと逃れるヤマメだが、それでなお完全回避には至らない。

スペルカード同士ですら正面から威力で押し負かす、それが風見幽香の底知れぬ実力のほんの一端だ。

息もつかせぬ連続攻撃に重ねて、幽香はここで初めて手札を切る。

「……花符『幻想郷の開花』」

「しょっ、瘴符『フィールドミアズマ』っ!」

ヤマメは焦りとともに残り少ないスペルカードを対抗宣言

した。瞬間、どうつと溢れた紅い瘴気があたりを満たす。

毒々しい紅の正体は、起死回生の一手を狙ってヤマメが展開した不定形の瘴気を伴う弾幕。

だがしかし、幽香は高出力の火力弾幕で、押し寄せる瘴気すら無造作に灼き切ってゆく。

風見幽香の真骨頂は、スペルカードに拠らない強力な高火力の通常弾幕だ。緻密に計算されたものとはまた違う、ただ相手の内懐に力強く一手を打ち込んでゆくだけの単純なものだが、その一撃一撃が必殺の威力を備えるため、回避は非常に困難だ。

撃ち込まれるたび轟音と閃光を撒き散らす重火力は、着実に相手の機動力と残機を奪い去ってゆく。

晴れた霧の中、幽香は悠然と変わらぬ姿で立ち、爆風に吹き飛ばされ、ボロボロになって膝をつく倒れ伏すヤマメを見下ろしていた。

四季のフラワーマスターは嗜虐心をたっぷりと乗せた笑みで、傘の先端をつい、とヤマメの頭に押し当てる。

「それでおしまい？」

「……………」

俯いたヤマメは答えない。

最後の一手も不発となり、もはやなすすべなく敗れ去るしかない土蜘蛛の無惨な姿は、運命や未来など読めずとも容易

に想像できた。

「幽香さんっ、もうやめて！ やめてあげてってばっ」

ヤマメの危機を感じ、裂かれた服を掻き寄せてリグルは幽香にしがみつく。が、四季のフラワーマスターはそれを意に介さず、ヤマメの襟に傘の先端を絡め、軽々と宙に吊り上げた。

「あら？ まだまだこれくらいで音を上げてもらっちゃ困るわ。ねえ？」

「う……」

だらりと手足を垂らして苦しげに呻くヤマメを見下ろし、幽香はくすりとサディスティックに微笑む。

容赦なし、手加減なし、温情なし。それが風見幽香の弾幕ごっここのルール。

（駄目、っ）

無抵抗のヤマメに、さらに追撃の弾幕を浴びせようとする幽香のしぐさに、リグルはぎり、と歯を軋ませて叫ぶ。

「幽香さんっ！」

悲鳴を呑みこんで、リグルが激昂のままスペルカードを宣言しようとした、その時。

「……………ごほっ、」

ふいに、

幽香は唐突にむせ出し、口を押さえた。

咳に身体を震わせ、ふらりと傾いた体を支えようとした足がたたらを踏む。

「っ、あ、ぐ、っは、ごほっ……っ!!」

咳を飲み混もうとしたところにもう一度咳がかさなり、幽香は大きく背中を丸めて傘を取り落とした。

「今だっ」

幽香の手元が緩んだのを見逃さず、ヤマメはフラワーマスタの腕を払いのけた。先程までのぐったりした様子が嘘のように、土蜘蛛は素早く地面を跳ねて幽香から距離を取る。

「ヤマメ!? ゆ、幽香さん?!!」

事態から置いてきぼりのリグルは、二人の間で戸惑うばかりだ。

幽香はなおも続く咳と鼻奥を焼く搔痒感に喘ぎながら、血走った目に涙を滲ませる。

「っ、ごほ、ごふ、げほっ……!」

霞む視線は、いくら擦つてもまったく収まらない。喉と鼻奥でちりちりと焼けるような鈍い痛みがフラワーマスタを襲っていた。

咳き込み、えづいて、身体を折るようにして何度も肺の中の息を吐き出し、とうとう涙までこぼして、幽香はようやく目の前の相手の能力に思い至った。

地上より排斥された、忌み嫌われた妖怪、土蜘蛛。

彼女が持つのは、『病を操る程度の能力』。

「貴方、まさか——」

ぎりっ、と奥歯を軋らせてヤマメを睨む幽香の手足に、繰り出された細い蜘蛛糸が絡み付いてゆく。幽香の力に比べれば脆弱な強度でしかないはずのヤマメの糸を、幽香の鈍った四肢は引き千切れない。

「……………っ」

「油断したわね。効きが悪かったから、ちよつと怖かったけど——」

慎重に距離を測り、ヤマメは幽香を拘束する糸を絞り上げた。1BOSの面前で膝をつくという己の失態に四肢をわななかせて抗おうとする幽香だが、こみあげる苦痛と身体を蝕む熱がそれを許さない。

幽香の強みは、強大な実力に裏打ちされた圧倒的な火力。視界を埋め尽くす絢爛劫花の弾幕で、相手の回避軌道を残らず焼き尽くす重火力の固定砲台だ。

反面、弾幕の分厚さ、密集度合いゆえに相殺合戦で撃ち負けることは殆どないと自負しているため、幽香自身は積極的に回避や移動することは少ない。それは、フラワーマスタが自分から戦場を移すことがないということを意味し、必然、ヤマメが仕組んだ罠の中に留まり続ける結果となった。

それでも、幽香には少々の障害なら踏み潰して蹂躞する自

信があつたが——

「毒には慣れてみたいんだけど、病気のほうは苦手だったみたいね。」

……『^{枯草熱}』って言うの。とっておきよ？ 貴方みたい

な花の妖怪には最適な、緩慢に死に至る病。言っておくけど、完治の方法はないわ。不治の病だから、これ」

ヤマメは、弾幕ごっこが始まった瞬間から、幽香の周囲に濃い病毒のフィールドを張り巡らせていた。とどめの『フィールドミイズマ』はそのカモフラージュ。

土蜘蛛がありつたけの力を注ぎ込んで作り出した瘴気領域の最深部に長時間留まり続けた結果、さしもの風見幽香もついに発症に至つたのだ。

「……っ」

油断無く糸を絞って、幽香の反撃——喚起しようとした植物の異常成長を押さえ込み、ヤマメはさらに続ける。

「あなたがリグルをどう思うかなんて、私が口に出すことじやないけど。でも、私の思いを邪魔する権利なんて、あなたにはない」

まっすぐに。

最強の妖怪から、目をそらすことなく、ヤマメは言う。

「風見幽香、今すぐここから立ち去りなさい」



花の香りだけを、後に残し。

その姿が小さくなつて森の奥に消え、さらには気配さえも途絶えてなお数十秒。ようやく張り詰めていた気を緩め、ヤマメは大きく大きく息を吐いた。

「……し、死ぬかと思つた……っ」

その場に、どさりと尻餅をつく。鼓動が跳ね、冷や汗が全身を浸し、冗談のように震え出す手足は、すっかり言うことをきかなくなつていた。

実際、去り際の幽香の殺気は凄まじく、真正面から見つめられるだけで肺が絞り上げられるようなブレッシャーだった。最後はもう震えそうになる脚を支え、絶対的な優位をとつたのだと虚勢を張るのだけで精一杯。あのままさらに一手詰めることは絶対に不可能だった。

弾幕ごっこではない、妖怪としての能力で相手を追い詰めたのだ。あそこで幽香がはつきりと不利を悟ってくれるだけの冷静さを残していなければ、あのままヤマメは容易く引き裂かれていたに違いない。

「ヤマメ!？」

「だ、大丈夫。平気。ちよつと気が抜けただけ……」

駆け寄ってくるリグルに頷いてみせて、ヤマメはそつと目

元をぬぐう。

枯草熱——などと大層な名前が付いてはいるが、アレは感染症でもなんでもない、花粉症の別名だ。

花の妖怪が花による病気なんかに罹るわけがないが、風見幽香の持つ能力、花を咲かせる程度の力が生来のものではないことを逆利用した結果、ヤマメの策はうまく効果を表した。

しかし彼女の本質はそこにはないのだから、幽香が花を咲かせる気まぐれを止めればすぐに回復するだろう。

そのうえで、恥をかかされたと逆上するか、たとえ一時の虚勢でもそれに騙された自分を恥じて口をつぐむかは、最強を自負する彼女の器にかかっている。

できれば後者がいいなあ、とヤマメは胸中でこつそりとつぶやいた。傍らで涙を浮かべているリグルを見上げ、声をかける。

「大丈夫？」

「ヤマメ……どうして？　なんで、そこまでして……私のために？」

ああ。

さっきの答えはきつとこれだ、と思いながら、ヤマメは地面に落ちたプレゼントの汚れを払い、そっと抱え上げた。

無惨に踏みつけられた包装の下から、燐粉の輝きを彩った布地が覗いている。

中身は、何度も何度も失敗しながらエンゼルヘアで縫った、黒蝶をモデルにしたナイトドレス。

それを手に、ヤマメはリグルに微笑む。

「えっと、その、……リグルが——」

いつの間にか、蜘蛛の巣に掛かっていた。

治りそうもない病に、罹っていた。

美しい羽根を夜空に拡げ、軽やかに飛ぶ少女の姿を思い描き、ヤマメはリグルの肩にドレスを掛ける。

「リグルのことが、好きだからじゃ、……理由にならない？」
「……！」

まるで、花がほころびるように、たおやかに。

答えてはにかむヤマメに、リグルは言葉を失っていた。

「恋の病は、治らないものだもの」

いつしか——あたりには虫や小鳥の囀りが戻り。

他に誰も居なくなつた森の中で、どちらからともなく——

ふたりはそっと寄り添い、指を深く絡めあっていた。



まだ冷え込む春先の夜、里のはずれにぼつんと灯る水銀灯が、ここ最近の八つ目鰻屋の目印だ。

そのカウンターで、熱燗に自家製ロックアイスを浮かべた

夜光杯の縁をくわえ、チルノがぼやく。

「あーあ……。最近リグルつてば付き合い悪いよな」

「しょうがないよチルノちゃん」

「わかつてるけどさー」

酒精でいくらか頬を紅くしつつ、杯を空けて口を尖らせるチルノ。もちろん、チルノだってリグルのことを責めているわけではない。

ただまあ、なんというか毎日毎日あれだけ見せ付けられていれば愚痴のひとつも言いたくなるというもので、それはおむね全員が同意見だった。最近の集まりがいつもの広場ではなく、もっぱらミステリアの屋台になってしまったのもそのあたりが理由である。

「ホント春よね。冬なのにねー。……はー、私にもなんかあーいう出会とかないかなあ」

こちららもすっかりお腹いっぱい、胃もたれの表情で、割烹着姿で調理台に突っ伏すミステリア。

そこへルーミアがやや焦げ気味の脂の乗った焼き串をはむはむぐくんと飲み込んで、

「……あれ？ いつものお客さんは違うの？」

「ぶっ!? な、何言い出すのよいきなり!? あ、あんなの違うに決まってるじゃないっ。あ、あれはその……」

「あーあー。ごちそうさまなのかー」

「違っ!?」

「違うのかー？ じゃあ、……みすちーは食べてもいいの？」

宵闇の妖怪にはばあと笑顔のまま、ミステリアをじっと見つめてじゅる、と涎を吸る。

「いやあーっ!?」

もはや定番のやり取り。抵抗空しくカウンターの上から飛び掛られ、がぶ、と頭にかじりつかれるミステリアの悲鳴が夜闇に響く。

「あーあ。春真っ盛りだなー」

「そうだね……」

振り仰いだ遠くの夜空、瞬く淡い光の群れとともに、とつておきのナイトドレスに装って夜空の空中散歩をする恋人たちを見上げ。

おてんば恋娘はしやうがないなあ、とつぶやきつつも、満面の笑顔で、大妖精と掲げた杯を打ち鳴らした。

二 大山鳴動する鼠一匹 〔東方星蓮船〕

薄蒼の高い空に、わずかなびく白い雲。

まだ芽も硬い枝だけの木々の間を吹き抜ける冷たい風にぶるつと背中を震わせ、リグルはマントの下に膝を抱え込んだ。揃えた手にほう、と息を吐きかける。

「はー。もう春だっていうけどまだ寒いなあ」

「この時期辛いよねえ」

あかぎれの入った指を痛そうに擦り、ミステイアもそれに応じる。気紛れで始めた八つ目鰻の屋台は、いまではすっかり夜道の風物詩となっている。最近では当初の目的だった焼き鳥撲滅運動などすっかり忘れて、割烹着の女将さん姿がえらく板についてきたのはいいことなのか悪いことなのか。

湖畔の森の広場には、いつもの通り見慣れた顔ぶれ。

人里とも他の妖怪の住まいからも程よく遠いこの近辺には、待ち合わせなどなくとも、自然と妖怪や妖精たちが集まる。

森の魔法使いに言わせればそれは偶然ではなく、ここが『そういう場所』だからなのだそうだ。

「おはよ、ルーミア」

「あうー……」

ふたりの隣、うつぶせに寝そべってやる気のない声を返す宵闇の妖怪。おでこには軽い火傷の跡まである。

「どうしたのよ、そんな情けない声して」

「おなかすいたー……」

「ルーミアちゃん、昨日、食べようとしたお爺ちゃんに逆に被われちゃったんだって」

「……十日ぶりの獲物だったのに。……あぐ」

「あ痛あ!? ちよつとこら!! 放しなさいルーミア!」

「やだー……」

「ひあん!? どこ噛んでっ……あーもう、い、今なにか残り物でも持つて来たげるから噛み付くなあ!!」

身の危険を覚えて暴れるミステイアと、それを逃すまいとかじり続けるルーミア。かしましくも絡まりあうふたりを見てリグルは苦笑する。

「なにやってんだか……」

「……くしゅっ」

と。可愛らしくしゃみに振り向けば、大妖精が目を閉じ、口元を押さえていた。

「風邪?」

「あ、うん……。そうかも。このところチルノちゃんと大蝦蟇さんの沼に行ってたから……」

「大ちゃんだらしないなあ。あそこの沼なんてちよつと氷点

下なくらいじゃん。あたいなんかそんなんで風邪ひいたこと一度もないよっ」

薄い胸を反らして誇らしげなチルノに、うんそうだね、と皆はちよっぴりの哀れみを噛み締めつつ頷いた。

「にしてもホント飽きないわねチルノ。なんどやったって食べられるだけじゃない」

「はむ。懲りないねー」

齒形を頭に付けたミステリアから押し付けられた蒲焼を、串ごと齧るルーミア。チルノと沼の大蝦蟇の確執はもはや天狗の新聞にも載らなくなつたような茶飯事だ。

「そんなことないってば。まだ寒いし、蛙の動きも鈍いから、簡単に倒せちゃうんだって」

「そのせいで機嫌悪くて、容赦ないんだけどね……」

汗を浮かべて、あはは、と頬をかく大妖精。その身体が定まらずにふらふらと揺れているのを見て、リグルはそのおでこにそつと手を伸ばす。

「なんか本当に辛そうだよ？　ねえ、無理しないで今日は帰つたほうが——」

「……おや。今度こそと思つたが……残念。ここでも妖精が憑かれていたか」

不意に空をよぎる影に、一同が揃つて空を仰ぐ。

声の主は晴れた空の蒼には似合わない、灰色の装いに大き

な丸い耳をした妖怪だった。細長いL字型のロッドを両手に構え、眷族らしき小さな鼠を乗せたバスケットを器用に尻尾にぶら下げている。

「君たちは飛宝を持ち出した中には見なかった顔だね。どこで拾つたのかは……詮索しても無駄か」

独りごちる見慣れない妖怪の前に、警戒を強めながらチルノは誰何する。

「あんた、誰？」

「私はナズーリン。見ての通り鼠の妖怪さ。宝探しが趣味で副業で本業だ。今はこういった宝を集めていてね」

と、ナズーリンと名乗つた妖怪鼠は、尻尾のバスケットに手を伸ばし、中の仔ネズミが取り出した赤色に輝く円盤状の物体ベクトル・フィールドを示してみせる。

両の手のひらに乗る程度の大きさのそれは、不可思議な重低音を唸らせながら彼女の手を離れ、支えもなしに浮かびあがつた。

ゆるゆると回転しながらナズーリンの周りを漂い始めた円盤に、リグルは眉をひそめる。

「……なに、それ？」

Undefined Fantastic Object
「未定義幻想物体。いわゆるひとつのUFOだよ」

「空飛ぶ円盤？」

その単語に聞き覚えはあつても、それが何なのかを正確に

知るものは、残念ながらこの場には居ない。

「こんなにちっちゃいんだっけ？ 中に人が乗れるとか聞いたことあるけど」

「んー、つまりこれは食べてもいいUFO？」

「おっと。食べられてもらっては困る」

じゆる、と涎を垂らしそうになっているルーミアに釘をさしながら、ナズーリンはロッドの先端で器用に円盤を引っかけ、バスケツトの中に放り込んだ。

「……さて。こちらとしてはご主人に頼まれた件もあるし、飛宝のほうは適当に誤魔化してもいいんだが、あまり手を抜いてばかりでムラサ船長に愚痴を言われるのも御免だ。それに、妖怪平等を唱える聖のせいで妖精が狂いっぱなしというのも格好がつかないだろう？」

「……？ よくわかんないってば」

「その君の持っているその飛宝さ」

ナズーリンは不敵に笑い、ロッドの先で大妖精を示す。

「え……？」

「君の不調はそれが原因だよ。もともと、自覚はないようだけれどね。飛宝に取り憑かれて調子が悪い程度で済んでいるのだから大したものだが、それはもともと聖のものでね。皆の大願成就のためにも返してもらわなければならない。」

——視符『ナズーリンペンデュラム』——

前触れもなく、ナズーリンはいきなりスペルカードを宣言した。岩のように巨大なペンデュラムが突如出現し、ナズーリンを中心に轟音を上げて旋回し始める。

「きやあ!!」

「ミスティア、ルーミア!!」

振り回されるペンデュラムは、針弾の弾幕を伴って見境なく全方位を薙ぎ払った。へし折られ倒れる木々と巻き上がる土煙に、ふたりの姿が飲み込まれてゆく。

「面倒だ、力ずくで引き剥がさせて貰うよ」

「ちよっと！ いきなりなにすんのよあんなっ!!」

「なに、少し痛いだけだよ。怖がらずに目をつぶっていれば直ぐに済む」

会話を打ち切って、ペンデュラムを引き寄せたナズーリンは、チルノを牽制するようにロッドを振り上げた。まるで陣を敷いた軍隊のごとく、無数の楔弾が戦列を組んで出現。突撃を始める。立て続けに獲物に喰らい付くその様は、さながら餓え暴れる鼠の群れのよう。

「つこの、やる気なら相手になるわよっ!!」

密度の濃い弾幕の前に、リグルは果敢に反撃を試みる。が、次々に押し寄せる弾幕の戦列に行く手を阻まれ、回避専念を余儀なくされて思うように照準もままならない。

「……リグルちゃんっ、チルノちゃん!!」

「危ないっ来ちゃダメ!!」

駆け寄ろうと木陰を飛び出した大妖精を、瞬く間に十重二十重の弾幕が取り囲む。逃げ場を残さず高速で周囲を包囲してゆく楔弾幕に込められた殺意は、弾幕ごっこの範疇をはるかに超えていた。

「ちよつと……洒落になんないわよ、それっ」

高難度^{ハルタイ}を通り越し、狂^ル気^キすら垣間見せるナズーリンの弾幕に、リグルの背中を冷たいものが這い上がる。

「――、あ」

迫り来る凶暴なネズミ弾幕の群れからとつさに転移して逃れようとした大妖精だが、集中の途中で顔を歪め、そのままふらふらと倒れこんでしまう。

「大ちゃん!」

「リグルはここにいてっ。援護お願い!!」

「チルノ!」

動揺するリグルを置き去りに、真っ先に楔弾幕の中に飛び込んだのはチルノだった。顔を庇いながら、氷の盾を作り出しては最小限の動作で直撃を回避し、降り注ぐ高速の弾幕陣の間を掻い潜り、大妖精の元へと駆け寄ってゆく。

「……え？」

直進突撃單純気合い避けがモットーのいつものチルノにあるまじき回避センスと緊急回避のタイミングに、リグルは目

を丸くする。

そうする間にも、密集する弾幕の中心点、大妖精の元に滑り込んだチルノは、指に挟んだスペルカードを宣言。

「凍符『バーフェクトフリーズ・改』!!」

チルノの代名詞とも呼べるカラフルな弾幕が展開した。

ナズーリンの楔弾幕とぶつかり合った『バーフェクトフリーズ』は、楔弾幕を巻き添えにして一斉に凍結した。

乱れ飛ぶ弾幕が静止したその一瞬の隙を突いて、大妖精を抱えあげたチルノは最短ルートで窮地を脱出する。

「……、うつそだあ……」

友人の想定外の大活躍が信じられず、リグルは呆然と自分の頬をつねっていた。……無論、その痛みは夢ではない。

「……甘く見ていたか」

表情を変え、ナズーリンが新たにスペルカードを宣言しようとしたその直前。狙いすましたかのように周囲に漆黒の闇が沸き起こる。

「させるかつ、ルーミア、行くよ!!」

「あいあいさー」

木々の間から染み出すように這い昇り、膨れ上がった闇が、ダウザーの小さな大将を瞬く間に包み込んでいた。さらにそこへ夜雀の澄んだ歌声が重ねて響く。

「……む」

ナズーリンは眉をよじり、瞬きとともに目を擦る。

ただの闇程度なら鼠の夜目で見通すことも不可能ではないだろう。しかしこれはそれにさらに夜雀の能力を追加した、二重隠蔽型の合体スペルだった。

自分の姿すら捉えられない深い暗闇の内側に囚われたことを悟って、ナズーリンはやむなく攻撃を中断、その場に静止を余儀なくされる。

「——なるほど」

だがしかし、ダウザーの小さな大将は慌てず騒がずに展開途中のペンデュラムを回収、次いで両のロッドを左右に交差させ、スペルカードを切り替えた。

「棒符『ビジーロッド』」

ナズーリンが構えたロッドの先端から鋭く細い光線が伸びてゆく。暗闇の中、ぐるんと彼女の周囲を一旋するロッドが、茫洋たる闇洋の中にはつきりと相手の居場所を挟み、指し示した。

「そこか」

即座にスペルの仕掛けを看破したナズーリンは、捉えた場所に弾幕を集中させた。

たちまち闇の奥から響く被弾1の撃墜音。雪のように降り積む粒状弾がミスティアの脇腹をかすめ、闇に変じたルーミアの脚に命中していた。

「えええ!!」

「な、なんで見えるのかー!!」

「ははっ。ダウザー相手に目くらましなんて間抜けもいいところだよ、君。地面の中に比べれば暗闇なんて見通すのはわけもない」

スペルブレイクと同時に晴れゆく闇を吹き散らして、再び旋回を始めるペンデュラム。ルーミアとミスティアは、鎖を伸び縮みさせながら迫る巨大なペンデュラムに追い詰められ、逃げ場をなくしていく。

自分を中心に周囲を無差別に攻撃する範囲型の弾幕に対しては、相手の視界を封じるという闇妖、夜雀の基本戦術は相性が悪すぎるのだ。

「くっ——」

奥歯を嚙んでリグルが応戦のためスペルカードを抜いたその時、吹き付ける強烈な冷気がその動作を制止する。

見れば、いつの間にか大妖精を抱えたチルノの姿がすぐそばにあった。

「ダメ、このままじゃ勝てない。逃げるよりリグルっ。みすちーも、ルーミアもっ」

「え!! ちょ、なに言ってるんチルノ!!」

「いいから、あたいの言う通りにしてっ」

リグルの反論を遮って、チルノは鋭くそう言い放つと、ぐ

つたりした大妖精をリグルに抱えさせて弾幕の中へ飛び出した。

「あたいが囹になるから、あっちで合流、いいよねっ！」

「え、えええ!!」

「どこ見てんのさ、こっちだっ」

「ほう？」

地を這うような低空で針弾の間を抜け、ペンデュラムの動きを鈍らせる蛇行の回避軌道を取りながら、ナズーリンの注意を引いて距離をとってゆくチルノを――

「誰、あれ……？」

信じられない気分で、リグルは見送っていた。



「~~~~~♪」

ご機嫌で二股の尻尾を揺らし、風呂敷包みを下げて森を歩くのは、スキマ妖怪の式の式、化猫の橙。

真新しい帽子の下でびこびこ揺れていた彼女の耳が、ふいに真上に跳ね上がる。

「にや？」

「ちええええええーんっ!!」

近くの茂みを向いた橙の目の前、まるで主よろしくの絶叫

と共に、ずぎざあーっ、と地面を滑って登場したリグルの姿を見、橙はきょとんと猫目を瞬かせた。

「あれ、リグル。どうした……の？」

橙の言葉が尻すばみに消えてゆく。

大妖精を抱えて現れたリグルの格好といったら酷いもので、服は裂け派手に汚れ、あちこちに軽い被弾の跡すらあった。

森の中木々にぶつかるのも構わずに全力で飛び回りながら弾幕でも展開しなければこうはならないだろう。呆気にとられた橙の反応も至極当然のものといえた。

「ちよ、ちようどよかったっ!! 橙、あなた猫よね!! 化け

猫よね!!」

「う、うん」

がばと起き上がったリグルにがっしと腕を掴まれて訊かれるが、事情のさっぱり分からない橙は困惑しながら耳を上下させるばかり。

「だったら、鼠退治なんか大得意よね? そうよね!!」

「な、なんだか分かんないけど、それくらいなら――」

「じゃあ早くあいつ追ひ払って!! 早く!!」

びし、とリグルの指差した先。

橙の身の丈でもある巨大なペンデュラムを振り回しながら木々を薙ぎ倒し、迫る妖怪鼠ナズーリンの姿があった。

「えっ」

彼女の周囲を旋回するペンデュラムは、いつのまにか先程の倍近い5つに増えている。

それを見て、さあ、と橙の顔から血の気が引いてゆく。

「なにそれこわい……」

たちまち尖っていた耳はべたんと伏せ、しつぽくるるんな負け犬状態。大事なお使いの荷物も放り出し、橙は脱兎のごとく四足になってナズーリンに背中を向け、全速力で駆け出してゆく。

「にやーっ!?」

「橙!? ちょ、どこ行くのっ!?」

「きよ、今日は式が憑いてないのーっ!!」

「この役立たずっ!!」

慌てて追いかけるリグルたちに併走され、これまた力いっぱい叫び返す橙。式の憑いていない化け猫なんて、夜に出でこない唐傘お化けのようなものだ。

一方、追うナズーリンは余裕たつぷりに笑みを浮かべ、

「猫、ねえ。……十二支に入れなかったような間抜けな鼠、鼠が遅れをとるとでも?」

——視符『高感度ナズーリンペンデュラム』

旋回するペンデュラムが繰り出され、針弾を撒き散らしながら地面や木々を容赦なくえぐってゆく。耳元を巨大な質量が掠める轟音に、橙はパニックを起こして右に左に跳ねまわ

った。

「にやーっ!?」

「ははっ。旧い鼠を舐めちやいけない。窮さなくても、ぼんくらの猫くらい噛み殺すよ?」

鳴かぬ猫は鼠を捕る、鳴く猫は鼠を捕らぬ。

……さて、君は鳴く猫かな、鳴かない猫かな?」

5つのペンデュラムを旋回させ、木々を薙ぎ倒しながら迫るナズーリン。さながら、八万四千匹の鉄の牙持つネズミの大群を率いたという頼豪阿蘭梨変じた鉄鼠のようだ。

すっかり怖気づいた橙は化け猫の矜持もどこへやら、ネズミに追われるまま大木の根元のうろへ飛び込んで、丸まって震えだす始末だった。

「あー、もうっ!?」

当てにしていた橙も頼りにならないことを理解したリグルは、そつと大妖精を木陰に下ろし、決死の覚悟でダウザーの小さな大将の前に躍り上がる。

「待ちなさいっ。もうこうなりやこつちだつて意地よっ」

「今度は蜚か。自分も光るくせに火に飛び込むのを止められないのかな、虫というやつは」

油断なくロッドを構えるナズーリンに、リグルはちら、と背後に寝かせた大妖精を庇える位置に移動しつつ、周囲から蟲を呼び集めてゆく。

「チルノばつかにいい格好させられるもんですか。私だってやるときややるわよっ!!」

「無茶はお勧めしないよ。これでも私は毘沙門天の使いだね。徹頭徹尾ただの通りすがりの妖怪の君とでは、目的も、意志も、個性も、設定の深さも、立ち絵の枚数も、——そして女の子としての魅力も違う」

「うっさい!!」
「そう。そうやってすぐに前しか見えなくなるのも良くないね」

挑発に乗せられるまま、頭に血を昇らせて突っ込むリグルを、待ち構えていたかのように布陣を組んだ弾幕が迎え撃った。

隊列を組み幾段にも陣を重ね、矢継ぎ早に突撃してくる弾幕から、リグルは必死に回避を試みる。

「このお……っ」

先程と同じように、仔ネズミを模した楔弾幕の戦列から逃れようとすればするほど、リグルはナズーリンから距離を取らざるを得なくなっていた。

「そ、そっちがスペカ宣言してるんだったら、遠慮なんていらないよねっ」

負け惜しみと共に叫ぶリグルだが、ナズーリンはそれを軽く笑い飛ばした

「——ハハッ。そもそも遠慮なんてできる実力があるのかな、君に？」

「っ、もう頭にきたーっ!!」

——蠢符『リトルバグストーム』

群れなし光る蟲の一群が、渦を巻くようにナズーリンへと殺到する。

が、小さな賢将は悠々と左右のロッドを振り、弾幕の戦列を操ってそれを迎え撃った。

同じく眷属を使役する主同士、その弾幕の激突となれば、勝負は指揮官の優劣が決める。一度は拮抗したかに見えた両社の趨勢は、すぐにナズーリンの側に傾いた。夜光の大量は、使い魔もろともに仔ネズミに食い荒らされ、残らず駆逐されてゆく。

必殺のスペルカードの一枚をあつさりと退けたナズーリンは、スペルブレイクの笑みと共にリグルを見た。

「……それで終わりかい？」

「このおっ!!」

挑発に応じるままに叫び、リグルは続いて灯符『ファイアフライフェノメノン』を宣言した。だが、それすらもナズーリンは対抗スペルを切ることなく、通常弾幕で押し切ってゆく。

目を見開くリグルの前で、2回目のクリアボーナスを手

ナズーリンは悠々と尻尾を振ってみせた。

「そんな……っ」

「筋はわるくない。けれど些細なことで頭に血を昇らせすぎるね、君は。蟲の王を名乗ろうと思うなら、もう少し冷静さと統率力を鍛えたほうがいい」

ナズーリンはリグルと同じように、自分以外の眷属を使役し、操る能力に長けている。

だが、リグルが動かせるのが鳥合の衆の蟲の群体なのに対して、ナズーリンは仔ネズミたちの軍隊を手足のように操っていた。整然と指揮に従う仔ネズミたちは、数こそ多いものの明確な意思を持たない蟲の群れとはまるで威力が違う。

同じように多くの眷属を率いる妖怪ながら、彼我の実力差はあまりにも明白だった。ルーミア達を退けたのは、相性だけの問題ではない。

「くっ——」

焦って手札に目を落とすリグルだが、そこに残るのはたった一枚、最後の切り札のみ。しかもこれは本来、弾幕ごっこの範疇からは逸脱したものだ。通常の勝負においては使われることはない。そして——万一、これまで切り抜かれてしまえば、本当に後がなかった。

躊躇するリグルを一瞥し、ナズーリンはひらりと身を翻し、動けない大妖精の元へと向かう。

「ま、待てっ!!」

「お断りだよ。これも仕事でね」

リグルのほうを振り返りもせず牽制の弾幕を展開、彼女を足止めし、ナズーリンは動けない大妖精に近付いてゆく。

が。俯く大妖精のその顔を覗き込んだところで、ダウザーの小さな大将はびくんと眉を跳ね上げた。

「……おや？」

そこにあったのは、意識のない大妖精の身体ではなく、彼女の姿を映した、鏡のように滑らかな氷の膜だった。

「これは——」

「かかったなっ!!」

瞬間。森中に響き渡るかのように、大音声が上がる。

地面に巨大な影が落ちた、と見えた刹那。

振り仰いだナズーリンの視界が捕らえたのは、ペンデュラムなどよりも遥かに巨大な氷塊を担ぎ上げ、急滑降してくる氷精の姿だった。

「チルノ?!」

「チルノちゃんっ」

「——っ!？」

目を見開き、舌打ちしたナズーリンが、咄嗟の反応でペンデュラムを引き寄せて盾にするのと同時、

「氷塊『グレートクラッシャー』つつ!!」

氷山の一角を切り取ったかのような圧倒的な質量をもって振り下ろされた氷塊が、ずがんと大地を揺るがす轟音を響かせ、地面に大穴を穿つ。

盾にしたペンデュラムごとナズーリンを押し潰して森に突き立った巨大な氷塊は、一瞬の間において粉々に砕け散る。

集めるだけ集めた冷気を氷に変え、そのままありつたけの力で叩きつけるだけのごくごく単純な、スperlカードとも言いがたいスperl。だが、長時間のチャージを完全に終えた時、その威力は凄まじいまでに高まるのだ。

ガラスの破砕音を思わせる涼やかな音が響く中、散ってゆく氷片を、翼のように纏いながら。

煙る霧氷の向こうで腰に手をあて胸を張り、氷精は高らかに勝利のVサインを示した。



「いい? もつかい言うよ。あたいは今、すっごく悲しいんだ!!」

頭に小さなこぶを作り、ちょこん、と正座をしてかしこまるナズーリンと、その隣で同じように正座で整列させられた

一同の前で、腰に手を当て仁王立ちのチルノが、びし、と指を突き付ける。

「どういうことなの!? どうしてそんな簡単に、みんなそろって分かり合おうとするのを拒否するのさっ!?!」

普段とはあまりにも違うキャラで、啞然とする皆の前を歩き来しつつ拳を握り、涙まで流して暑く苦しく力説するチルノ。

「見境のない暴力はなんにも生まないんだよ!! 楽しくない弾幕ごっこなんて、そんなの全然つまんないじゃないっ」

「……あの、チルノ? それはそれとして、なんで私たちまで怒られなきゃならないの? 喧嘩ふっかけてきたのあっちのほうじゃないっ」

「しやらー……っぶ!!」

「ひやんっ!?!」

いきなり鼻先にひやり、と冷たい指先を突き付けられ、飛びあがるミステア。

「な、なにすんのよチルノ! あんた、こいつの味方する気?!」

「みすちー。ナズりんになって事情はあったんだよ? それをちゃんと聞いてあげずに、無視したのはあたいだってわかってる?」

「……そりゃ結果的にはそうかもだけど」

珍しくチルノに正論を言われ、鼻白むミステイア。

その様子にほう、と片眉を跳ね上げるナズーリンだが、チルノはそのままぐりと彼女のほうに向きなおり、

「ナズりんもそう！ 力づくで病氣の大ちゃんを無理矢理とか、鬼畜にもほどがあるよっ!!」

「その語弊のある言い方はどうかと思うのだがね」

すっかり巻き込まれたナズーリンも、ややあきれた表情で続ける。

「私も行き過ぎたところもあったのは確かだ。非礼は詫びなければならぬが、こちらにも事情があつてね。

さっきも言ったが、君たちの持っていたあの飛宝は妖精に取り憑いて狂わせてしまう性質をもつものだ。弟殿の法力は強大でね、それが込められた飛宝を妖精のような非力な存在が長時間所持し続けられ、そのあり方すら歪めてしまいかねない。

私はその回収を命じられているというわけさ。方法は乱暴かもしれないが、妖精は死ぬことはないし、飛宝を取り出すにはそれが一番手っ取り早いだろう？」

「あのさ」

ずい、と背伸びをしつつナズーリンのそばに詰め寄り、チルノは視線も陰しく彼女の顔を見据えた。

「そういうのやめてよね。そりや確かにあたいた達は怪我し

ても『一回休み』ですぐに帰ってくるけどさ、それでなかったことになるわけじゃないよ。それまではやっぱり大ちゃんと会えないんだから」

「……………」

「元に戻るからって、何やってもいいとか。そーゆう風に思われるの、なんかヤだ」

「チルノ……？」

腰に手を当て、ふい、とそっぽを向くチルノを、一同は言葉も忘れて見つめていた。

が、それもつかの間。こほんと咳払いをしたチルノは、またさっきの暑苦しい調子で大きく手を広げる。

「さあ、みんな一緒に手を繋ごう！ それでおしまいにしようよ！ 握手で仲直り！」

有無を言わずの迫力に、思わず手を出すナズーリン。チルノはその手をしっかりと握りしめ、ぶんぶんと上下に振りまわす。

「さ、みんなもっ」

「あ。う。うん」

同じく勢いに押されて、リグル達も円陣のように掌を重ねさせられてしまう。

「よし、これにて一件落着ねっ」

ぐっと拳をかため、あらぬ方を見つめて力強く宣言する氷

精の様子に、さすがに不安になってきたリグルが声をひそめて皆に耳打ちした。

「……ねえ、やっぱなんかおかしくない？ 絶対変だって。今日のチルノ。変なものでも食べたのかな？」

「そんなこと言われたって知らないわよっ」

「あー。熱血だねえ」

「……つまり普段はこうじゃないのだね？」

問いかけるナズーリンに、揃って頷く皆。ダウザーの小さな大将はふむ、と顎に手をあて、おもむろに腰のロッドを抜いた。

皆の疑念もそちのけで熱弁を振るう氷精を視界に入れないがら二度、三度と慎重にロッドの手応えを確かめる。

「成程。つまり……」

何事か納得すると、ナズーリンはそのままたつつかとチルノの傍に歩み寄った。おもむろに振りかざしたロッドを、氷精の頭めがけて勢いよく振り下ろす。

「痛!!」

景気のいい被弾音とともに、目を回したチルノから緑の円盤が飛び出した。逃げようとする飛宝をロッドで捕獲、回収して眉を寄せ、賢将は苦い顔。

「こういう訳か。そちらのお嬢さんではなく、こっちが飛宝に憑かれていた。……いやはや、我ながらなんという初歩

的なミスをしたものだ」

「なーんだ」

「どうりで。ヘンだと思ったー」

「このままだったらどうしようかと思ったよ……」

つまり、マイナスにマイナスを掛け算してプラスになっていたということだった。氷精の変調の理由がやっと解明されたことでひと安心する一同の中、チルノが頭を押さえて起き上がる。

「……いったあ……」

「だいたいようぶチルノちゃん？ もう元に戻った？ 3 たす

6 は？ 4 たす5 はっ？」

「なに言ってるんの大ちゃん？ って大ちゃん？」

「よかったあ……」

ぱちくりと瞬きをするチルノが、ようやくいつもの調子に戻ったことで緊張の糸が切れたのか。大妖精はチルノに肩を寄せるようにしてへたり込んでしまう。

驚いてその肩を揺り動かすチルノだが、大妖精は穏やかな表情で小さな寝息を立てるばかりだった。

「……寝ちゃってる。夜更かしとかしてたのかな？」

「ま、そんなとこよね。きっと」

ルーミア、ミスティアとこっそり顔を見合わせ、リグルは小さく笑う。

一方、チルノはナズーリンに向き直り、

「……えつと、それでナズりん。何の話だっけ？」

「っ、ははっ」

そんな風にあつげらかんと言うチルノに、ナズーリンはとうとう堪え切れないというように吹き出した。

「なによ。あたいの顔見て笑うとか失礼じゃないっ」

「ああ、いや、違うんだ。そうではなくて——」

懽然とするチルノに、ナズーリンは笑いをおさめ、腰のロツドを外して静かに腰を折った。

「……本当に、すまなかつた。このとおりだ」

「……どういふこと？」

いきなり態度を変えたナズーリンに、少なからず驚きを見せるミスティアとリグル。

「まったく、完璧に私の負けだよ。知らぬこととは言え、君の友達に酷いことをしてしまった。君達を侮辱したことを含めて、謝らせて欲しい」

深く頭を下げるナズーリンに、けれどチルノは首をこくと傾げ——さして悩むこともなく、大きく頷く。

「なんかよくわかんないけど、わかればいいのよっ」

その返事は、ああいつものチルノだ、とその場の全員が納得するものだった。

ようやく戻ってきた和やかな雰囲気の中、いつしか暖か

な陽射しがあたりに満ちてゆく。

遠く、春の湊の青い空を、大きな箱舟の影が横切り、悠然と雲の彼方に消えていった。



僧、洞山に問う、「寒暑到来せば、如何にか廻避せん」。

山云く、「何ぞ寒暑無き処に去かざる」。

僧云く、「如何なるか是れ寒暑無き処」。

山云く、「寒き時は闇黎を寒殺し、熱き時は闇黎を熱殺す」。

（碧巖録 第四十三則 洞山寒暑）



【あとがき】

はじめまして。そしてお久しぶりです。

お手にとつて頂きましてありがとうございます。銅おりはと申します。

というわけで『地と星に逢う金蘭の契り』をお送りしました。賑々しくも朗らかに、妖精と妖怪たちの出会いをテーマに、友情や恋模様などを描く当サークル6冊目のSS本となります。

ヤマメのリグルの関係については、地霊殿初プレイ以来書きたいと思っていたお話でした。読み返してみるに、うちのヤマメさんは実に恋する乙女だなあと感じます。一般にはもつとなんとか、おばちゃん口調もとい、お姉さんなイメージが強いでしょうか。

後編では星蓮船騒動に絡めてチルノの成長……というか、彼女自身の変質と「妖精」という種族との価値観の違いを書こうとしてみた……んですが、なんだかナズーリンに全部持つて行かれた気配。

友人からは「いや1BOSS同士でこの力量差はどうよ」などと言われましたが、そこはまあなんというか、あのカリスマ溢れるセリフのせいです。はい。……実際、実力は相当

なものだと思っんですよね、彼女。

……そしてリグルにはごめんなさい。出番の割に全然見せ場がなくて、本当申し訳ありません。

さて。ページ増でお送りしてきました今回も、そろそろ紙幅が・尽きてきました。

拙い部分は多々ありますが、少しでもお楽しみたいだければ幸いです。

——それでは。

また次の機会にお会いできることを願って。

「地と星に会う金蘭の契り」

発行 平成21年11月15日 大⑨州東方祭

オルハザカサンバンチ
折葉坂三番地

あかがね
銅おりは

<http://oruhazaka.blog28.fc2.com/>
<http://members.jcom.home.ne.jp/oriha/index.htm>



東方 project FanBook

発行：折葉坂三番地

H21.11.15